

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 5 号 (7 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
イネ	葉いもち 紋枯病 セジロウンカ ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類	<u>やや多</u> (並) 並(やや少) 並(並) 並(やや多) <u>やや多</u> (並)
ダイズ、 アズキ	アブラムシ類とウ イルス病	並(やや多)
ナシ	黒斑病 黒星病 ハダニ類	<u>やや多</u> (並) <u>やや多</u> (やや少) <u>やや多</u> (多)
ブドウ	べと病	並(やや多)
カキ	うどんこ病	<u>やや多</u> (並)
カンキツ	ハダニ類	<u>多</u> (多)
果樹全般	カメムシ類	<u>やや多</u> (やや多)
チャ	炭疽病 チャノコカクモ ンハマキ チャノホソガ	山城 やや少(少) 丹波 並(多) 丹後 並(並) 山城 並(並) 丹波 やや少(並) 丹後 並(並) 山城 並(並) 丹波 並(並) 丹後 並(やや少)

作物名	病虫害名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
チャ	カンザワハダニ チャノキイロア ザミウマ チャノミドリヒ メヨコバイ クワシロカイガ ラムシ	山城 やや少(やや少) 丹波 <u>多</u> (多) 丹後 並(やや多) <u>やや多</u> (多) <u>やや多</u> (多) 山城 少(やや少) 丹波 並(多) 丹後 やや少(やや少)
果菜類	疫病・褐色腐敗病 うどんこ病 アブラムシ類と モザイク病 アザミウマ類 ハモグリバエ類	並(並) <u>やや多</u> (並) やや少(やや少) <u>やや多</u> (多) 並(やや多)
ウリ類	べと病 炭疽病	<u>やや多</u> (多) 並(並)
キュウリ	斑点細菌病	並(並)
ネギ	ネギアザミウマと ネギえそ条斑病 ネギハモグリバエ	並(やや多) やや少(並)
野菜全般	ハダニ類	<u>やや多</u> (多)

※平年とは過去 10 年の平均である。

目次

予報の概要
予報本文
今後注意すべきその他の病虫害等.....
参考
I 近畿地方の気象の 1 か月予報・・
II 用語の定義.....
III 予報本文の見方.....

1 農作物病虫害情報サービス
2 ホームページ
17 <https://www.pref.kyoto.jp/byogai/>



※QR コードは株式会社デンソー
ウェブの登録商標です

予報本文

イネ

1 葉いもち

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 南丹地域の本田で発生を認めている（平年比多い）（+）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	6.7	0.7
発病株率(%)	0.9	0.1

(2) 南丹地域の一部で、補植用苗に発生を確認している（+）。

(3) 長期持続型箱施用剤の普及率が高まっている（-）。

(4) 向こう1カ月の気温は平年比高く（-）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 補植用苗が葉いもちの発生源となるので、放置したままの苗は早急に抜取り処分する。

(2) いもち病の発生は気象に大きく影響されるので、曇雨天が続く場合には注意する。

(3) ほ場の見回りを行い、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に多肥田や山間、山沿いの水田では注意する。

2 紋枯病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、発生を認めていない。

(2) 昨年8月の発生量は平年並。

項目	前年8月	平年値
発生ほ場率(%)	23.3	34.0
発病株率(%)	4.3	5.4

(3) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 分けつ期ごろに水際葉鞘に発生し、その後水平、上位方向に進展する。

(2) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。

(3) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。

(4) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。

(5) 窒素の多用を避け、過繁茂にならないよう施肥管理に注意する。

3 セジロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 6月第2半旬現在、予察灯への誘殺を認めていない。

(2) 6月中旬現在、本田での発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	0.0	1.3
虫数(頭)	0.0	0.02

※本田20回すくい取り調査。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨期に海外から飛来し、吸汁加害する。
- (2) 梅雨前線の活動が活発化すると多飛来することがあるので注意する。
- (3) 7月中旬以降、ほ場を見回り、株当たり10頭以上の発生を認めた場合は防除する。なお、幼虫は株元に生息しているので、薬剤が株元までかかるよう丁寧に散布する。

4 ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、本田で発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発生ほ場率(%)	0.0	3.4
虫数(頭)	0.0	0.6

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接吸汁加害する他、萎縮病等を媒介する。

5 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、本田で発生を認めず（平年比少ない）（－）、畦畔雑草での発生量は平年並。

	項目	本年	平年値
本田	発生ほ場率(%)	0.0	6.8
	虫数(頭)	0.0	0.2
畦畔	発生ほ場率(%)	46.7	45.5
	虫数(頭)	2.2	3.9

※20回すくい取り調査。

- (2) アカヒゲホソミドリカスミカメの予察灯への誘殺数は、亀岡で平年比多く（＋）、京田辺及び京丹後では誘殺を認めなかった（京田辺：平年並、京丹後：平年比少ない（－））。

場所	本年	平年値
京田辺市	0	4.2
亀岡市	8	2.6
京丹後市	0	4.5

※5月第3半旬～6月第2半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

- (3) アカスジカスミカメの予察灯への誘殺数は、京田辺で平年比多く（＋）、亀岡で平年並、京丹後で平年比やや少ない（－）。

場所	本年	平年値
京田辺市	2	0.6
亀岡市	7	7.5
京丹後市	8	13.7

※5月第3半旬～6月第2半旬までの合計誘殺虫数(頭)。

- (4) 向こう1カ月の気温は平年比高いと予想されている（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいる

- が、特に、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
 - (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
 - (4) 近年多発し問題となっている地帯では穂揃期と傾穂期の防除（共同、一斉）が有効である。
 - (5) 平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。これまでに山城地域と丹波地域の一部で本種の発生を確認している。本種は、他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp17を参照

ダイズ、アズキ

1 アブラムシ類とウイルス病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月第3半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は平年比やや少ない（-）。

項目	本年	平年値
黄色水盤誘殺数(頭)	28.0	98.9
*誘殺数(頭)：5月第4半旬～6月第3半旬の合計値		

- (2) 向こう1カ月の気温は平年比高く（+）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ほ場周辺のマメ科雑草を除去する。
- (2) ウイルス病はアブラムシ類が伝搬するので、発生初期の防除に留意する。
- (3) 種子塗布剤、粒剤の使用も有効である。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp17を参照

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	4.5	3.0
発生ほ場率(%)	75.0	59.7

- (2) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 葉が繁茂する梅雨期は、本病感染の最盛期であり、降雨が続くと被害が多くなる。薬剤防除を徹底する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

（1）6月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	5.4	3.0
発生ほ場率(%)	40.0	36.0

（2）向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）降雨が続く、涼しい年に発生が多くなる。

3 ブドウ ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

（1）6月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	0.0	0.8
発生ほ場率(%)	0.0	20.0

（2）向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
- （2）ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

（1）6月中旬現在、発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率(%)	30.0	21.7
発生ほ場率(%)	100.0	100.0

（2）向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（1）夏季の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。

5 ナシ、カンキツ ハダニ類

予報内容 発生量：ナシ 平年比やや多い（前年比多い）
カンキツ 平年比多い（前年比多い）

予報の根拠

（1）6月中旬現在、発生量はナシでは平年並で、カンキツで平年比やや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
ナシ	寄生葉率(%)	0.7	1.5
	発生ほ場率(%)	20.0	24.5
カンキツ	寄生葉率(%)	23.0	10.5
	発生ほ場率(%)	100.0	66.7

(2) 向こう1カ月の気温は平年比高く(+)、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 梅雨明け以降、急激に増加するので注意する。
- (2) 年間世代数が多く、薬剤抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

6 果樹全般 カメモムシ類（チャバネアオカメモムシ、クサギカメモムシ等）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は、ナシで発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
被害果率(%)	0.0	0.3
被害ほ場率(%)	0.0	9.0

(2) チャバネアオカメモムシの予察灯（BL）での誘殺数は、京田辺市及び京丹後市で平年比やや多く（+）、亀岡市で平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	36	13.6
亀岡市	3	8.1
京丹後市	32	18.2

※誘殺数：5月第3半旬～6月第2半旬の合計値

(3) チャバネアオカメモムシのフェロモントラップでの誘殺数は、京田辺市で平年比多く（+）、亀岡市でやや多く（+）、京丹後市で平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	13.0	3.1
亀岡市	75.4	25.8
京丹後市	2.0	3.1

※誘殺数：5月第3半旬～6月第2半旬の合計値

(4) クサギカメモムシの予察灯（BL）への誘殺は、京田辺市及び亀岡市では認めず（平年並）、京丹後市で平年比多い（+）。

場所	本年	平年値
京田辺市	0	0.2
亀岡市	0	0.1
京丹後市	3	0.8

※誘殺数：5月第3半旬～6月第2半旬の合計値

(5) ツヤアオカメモムシの予察灯（BL）への誘殺は、京田辺市及び亀岡市で平年並、京丹後市で平年比やや多い（+）。

場所	本年	平年値
京田辺市	6	5.8
亀岡市	1	1.0
京丹後市	2	2.6

※誘殺数：5月第3半旬～6月第2半旬の合計値

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来し局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
 (2) ナシ、モモなどの無袋栽培やカキ、カンキツでは被害が多くなる。

チャ

1 炭疽病

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比少ない）
 丹波 平年並（前年比多い）
 丹後 平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比やや少なく（－）、丹波及び丹後で平年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	発病葉数(㎡当たり)	0.9	4.1
	発生ほ場率(%)	47.1	54.8
丹波	発病葉数(㎡当たり)	6.0	7.4
	発生ほ場率(%)	100.0	65.0
丹後	発病葉数(㎡当たり)	0.5	1.2
	発生ほ場率(%)	25.0	36.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 伝染源は、摘採されずに残った前茶期の病葉である。
 (2) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
 (3) 防除適期は、三番茶芽の第1～2葉開葉期である。

2 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年並（前年並）
 丹波 平年比やや少ない（前年並）
 丹後 平年並（前年並）
 次世代幼虫ふ化期：
 山城 6月第6半旬～7月第2半旬（平年並）
 丹波 6月第6半旬～7月第2半旬（平年比やや遅い）
 丹後 7月第1半旬～7月第3半旬（例年比やや遅い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量は山城で発生を認めず（平年並）、丹波で発生を認めず（平年比少ない（－））、丹後で平年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	綴葉数(㎡当たり)	0.0	0.5
	幼虫・蛹数(㎡当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	0.0	10.4
丹波	綴葉数(㎡当たり)	0.0	9.2
	幼虫・蛹数(㎡当たり)	0.0	1.6
	発生ほ場率(%)	0.0	47.5
丹後	綴葉数(㎡当たり)	0.3	0.7
	幼虫・蛹数(㎡当たり)	0.0	0.2
	発生ほ場率(%)	25.0	15.8

(2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比やや少なく(－)、綾部市は平年比多く(＋)、京丹後市では例年比やや多い(＋)。

場 所	項 目	本 年	平 年 値
宇治市	誘殺数(頭)	159.7	833.1
綾部市	誘殺数(頭)	664.0	263.0
京丹後市	誘殺数(頭)	7.8	5.0

※誘殺数(頭)：5月第3半旬～6月第2半旬計

(3) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治市で平年並、綾部市で平年比やや遅く、京丹後市で例年比やや遅い。

(4) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 通常、本虫の宇治市での誘殺盛期は、5月上～中旬、6月中旬～7月上旬、7月下旬～8月中旬、9月中旬～10月上旬の4回世代を繰り返す。

(2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

(3) 近年、山城地域においてジアミド系及びIGR剤に抵抗性を発達させた個体群が確認されている。そのため、これらの薬剤の効果が高いと感じられる場合は使用を中止し、他系統の薬剤を使用する。

3 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年並(前年並)
丹波 平年並(前年並)
丹後 平年並(前年比やや少ない)

次世代幼虫ふ化期：
山城 7月第5半旬～8月第1半旬(平年比やや遅い)
丹波 7月第2半旬～第3半旬(平年比やや早い)
丹後 7月第4半旬～第6半旬(平年並)

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年並、丹波で例年並、丹後で発生を認めていない(例年並)。

地 域	項 目	本 年	平 年 値
山城	寄生芽率(%)	1.3	3.0
	巻葉数(m ² 当たり)	0.2	0.1
	発生ほ場率(%)	18.8	21.0
丹波	寄生芽率(%)	16.0	31.9
	巻葉数(m ² 当たり)	0.7	0.4
	発生ほ場率(%)	100.0	35.8
丹後	寄生芽率(%)	-	21.7
	巻葉数(m ² 当たり)	0.0	0.4
	発生ほ場率(%)	0.0	42.5

(2) フェロモントラップへの誘殺数は、宇治市は平年並、綾部市は平年比やや少なく(－)、京丹後市は例年並。

場 所	項 目	本 年	平 年 値
宇治市	誘殺数(頭)	844.0	2024.6
綾部市	誘殺数(頭)	308.1	1202.8
京丹後市	誘殺数(頭)	568.4	606.1

※誘殺数(頭)：5月第3半旬～6月第2半旬計

(3) フェロモントラップへの誘殺盛期は、宇治市は平年比やや遅く、綾部市は平年比やや早く、京丹後市は例年並。

(4) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返す。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。

4 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
 丹波 平年比多い（前年比多い）
 丹後 平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比少なく（－）、丹波で平年比やや多く（＋）、丹後で平年比やや少ない（－）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率（％）	3.3	10.2
	寄生虫数(100葉当たり)	20.6	60.1
	発生ほ場率（％）	31.8	65.2
丹波	寄生葉率（％）	11.7	5.5
	寄生虫数(100葉当たり)	36.8	35.0
	発生ほ場率（％）	83.3	43.3
丹後	寄生葉率（％）	2.5	6.8
	寄生虫数(100葉当たり)	2.5	32.4
	発生ほ場率（％）	75.0	60.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖力は10～30℃の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、葉の裏側に生息するので、薬剤は葉裏にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 園をよく見回り、発生が多い園では二番茶摘採後に防除を徹底する。

5 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は、山城で平年並、丹波で例年比やや多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率（％）	5.6	13.1
	発生ほ場率（％）	55.6	75.2
丹波	寄生・被害芽率（％）	24.7	9.7
	発生ほ場率（％）	66.7	85.4
丹後	寄生・被害芽率（％）	-	29.7
	発生ほ場率（％）	-	91.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く（＋）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶期以降に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (4) 発生の多い園では、三番茶芽の萌芽期と第1葉開葉期の2回散布の効果が高い。
- (5) ネオニコチノイド系、ピレスロイド系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同一系統の使用を避ける。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量： 平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は、山城で平年比やや多く（+）、丹波で例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生・被害芽率（%）	1.8	2.4
	発生ほ場率（%）	90.9	37.0
丹波	寄生・被害芽率（%）	6.7	7.2
	発生ほ場率（%）	66.7	87.5
丹後	寄生・被害芽率（%）	-	1.1
	発生ほ場率（%）	-	48.6

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶期以降、発生が多くなる。
- (2) 防除適期は、新芽伸育期である。
- (3) ネオニコチノイド系、有機リン系などの薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、同一系統の連用を避ける。

7 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量： 山城 平年比少ない（前年比やや少ない）
丹波 平年並（前年比多い）
丹後 平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は山城で平年比少なく（-）、丹波で平年並、丹後で平年比やや少ない（-）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生株率（%）	7.6	18.5
	発生ほ場率（%）	38.1	62.8
丹波	寄生株率（%）	33.3	32.8
	発生ほ場率（%）	100.0	73.3
丹後	寄生株率（%）	7.5	30.0
	発生ほ場率（%）	50.0	70.0

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。
- (2) 園を見回り発生の多い園では注意する。
- (3) 第1世代の発生が多かった園では特に注意し、幼虫ふ化期の防除に留意する。世代が進むほど幼虫ふ化時期がばらつき、ふ化期間が長くなるため、第2

世代の防除は2回散布の効果が高い。
 (4) 薬剤散布は株内部の枝に十分かかるように行う。

※今後注意すべきその他の病害虫等はp 18を参照

野菜

1 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、ナスで褐色腐敗病の発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率（%）	0.0	0.0

(2) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを行い、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年並）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、トマトでの発生量は平年比多く（+）、キュウリ、ナスで発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
トマト	発病程度	18.6	4.0
キュウリ	発病株率（%）	0.0	1.4
ナス	発病株率（%）	0.0	0.0

(2) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (3) トウガラシ類では、ハダニ類による被害と判別が難しいので、被害葉を十分に観察する。
- (4) 菌糸が組織内で増殖するため薬液が十分付着するよう、ていねいに散布する。

3 ウリ類 べと病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、キュウリでの発生量は平年比やや多い（+）。

項目	本年	平年値
発病葉率 (%)	30.7	4.3
発生ほ場率 (%)	33.3	32.5

(2) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20～25℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。

4 ウリ類 炭疽病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、キュウリで発生を認めていない（平年並）。
- (2) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温22～24℃で降雨が続くと伝染、まん延しやすい。発病後の防除は効果が劣るので、予防、早期防除に重点を置く。
- (2) 種子伝染するほか、被害作物の残さ、資材等が伝染源となる。
- (3) 窒素質肥料の多用は発病を助長するので注意する。
- (4) 夏秋作に発生しやすいので注意する。

5 キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、キュウリで発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病葉率 (%)	0.0	5.2
発生ほ場率 (%)	0.0	10.0

(2) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入し発病する場が多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 多湿が発病を助長するので、施設では換気を十分に行う。
- (4) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

6 野菜全般 ハダニ類（チャノホコリダニを含む）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在の発生量は、キュウリで平年並、ナスで平年比多い（+）。

作物	項目	本年	平年値
キュウリ	寄生虫数 (頭/葉)	0.01	0.08
	寄生葉率 (%)	1.3	2.4
ナス	寄生虫数 (頭/葉)	0.18	0.04
	寄生葉率 (%)	4.4	0.8

(2) 向こう1カ月の気温は平年比高く (+)、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 梅雨明け後急激に増殖するので、梅雨明け後の防除が大切である。
- (3) ハウス栽培では天候に関わらず発生しやすい。
- (4) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

7 果菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在、アブラムシ類の発生は、トマト及びキュウリで認めず（平年並）、ナスでは平年比やや少ない（-）。

作物	項目	本年	平年値
トマト	寄生株率 (%)	0.0	1.2
キュウリ	寄生虫数 (頭/葉)	0.00	0.02
	寄生葉率 (%)	0.0	1.1
ナス	寄生虫数 (頭/葉)	0.04	0.34
	寄生葉率 (%)	1.9	14.5

(2) 6月中旬現在、キュウリでモザイク病の発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率 (%)	0.0	0.6

(3) 6月第3半旬現在、アブラムシ類の黄色水盤での誘殺数は平年比やや少ない（-）。

項目	本年	平年値
黄色水盤誘殺数 (頭)	28.0	98.9

* 誘殺数 (頭) : 5月第4半旬~6月第3半旬の合計値

(4) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。
- (3) キュウリの急性萎凋症の発生の多いところでは、アブラムシ類の飛来に特に注意する。

8 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、トマトでの寄生花率は例年並、白ぶくれ症果率は例年比高く（+）、キュウリでの発生量は平年比少なく（-）、ナスでは平年比やや多い（+）。

作物	項目	本年	平年値（例年値）
ト マ ト	寄生花率（%）	10.5	(9.1)
	白ぶくれ果率（%）	12.4	(3.2)
キュウリ	寄生虫数（頭/葉）	0.02	4.0
	寄生葉率（%）	2.0	52.2
ナ ス	寄生虫数（頭/葉）	0.10	0.13
	寄生葉率（%）	6.9	4.7

- (2) 向こう1カ月の気温は平年比高く（+）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等ウイルス病を媒介する種もいる。
(2) ハウスや雨よけ栽培では、高温乾燥が続くと特に多発しやすいので注意する。
(3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

9 ネギ ネギアザミウマとえそ条斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、ネギアザミウマの発生量は平年比やや少ない（-）。

株の種類*	項目	本年	平年値（例年値）
小株	被害株率（%）	54.0	93.7
	発生ほ場率（%）	100.0	100.0
大株	被害株率（%）	73.5	(94.9)
	発生ほ場率（%）	100.0	(100.0)

*小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上

- (2) 6月中旬現在、えそ条斑病の発生量は小株で例年比やや少なく（-）、大株で例年並。

株の種類*	項目	本年	平年値（例年値）
小株	発病株率（%）	12.0	34.1
	発病度	4.3	9.3
大株	発病株率（%）	27.0	(37.9)
	発病度	6.8	(9.1)

*小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上

- (3) 向こう1カ月の気温は平年比高く（+）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ネギアザミウマは、年間10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス (Iris yellow spot virus: IYSV) による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。
- (6) 新系統 (産雄性生殖系統) と在来系統の殺虫剤感受性は異なるので、新系統の発生を確認している地域 (山城及び南丹地域) では注意する。

詳細は平成29年3月27日付「防除所ニュース平成29年第3、4号」及び

技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news3go_iysv_negiazamiuma.pdf

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news4go_negiazamiumakeitou_hoka.pdf

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf

10 果菜類 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年並 (前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 6月中旬現在、発生量はトマト及びキュウリで認めず (平年並)、ナスで平年並。

作物	項目	本年	平年値
ト マ ト	被害葉率 (%)	0.0	3.2
	発生ほ場率 (%)	0.0	22.0
キュウリ	被害葉率 (%)	0.0	1.9
	発生ほ場率 (%)	0.0	39.2
ナ ス	被害葉率 (%)	0.0	1.0
	発生ほ場率 (%)	14.3	30.0

- (2) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 苗からの持ち込みを防ぎ、被害植物の残さは土中に埋めて処分する。施設栽培では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを張る。
- (2) 黄色粘着ロールをハウス周囲及び開口部に展張する。
- (3) 発生を認めたら被害葉を取り除き、発生初期の防除に留意する。
- (4) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

11 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

(1) 6月中旬現在の発生量は、小株で平年比やや少なく（－）、大株で発生を認めていない（例年比少ない）（－）。

株の種類*	項目	本年	平年値（例年値）
小株	被害株率（％）	1.0	22.7
	発生ほ場率（％）	25.0	54.5
大株	被害株率（％）	0.0	(7.1)
	発生ほ場率（％）	0.0	(24.9)

*小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上

(2) 向こう1カ月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

詳細は平成31年3月13日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu201803_1.pdf

※今後注意すべきその他の病害虫等はp18を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

発生量等を予想していない病害虫について、発生生態及び注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 トビイロウンカ、コブノメイガ

6月第2半旬現在、トビイロウンカ及びコブノメイガの予察灯での誘殺を認めていない。 いずれも海外飛来害虫であるため、今後梅雨前線が北上したり、活動が活発化すると多飛来することがあるので、予察情報に十分注意する。

2 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、茎立後、葉が濡れているときにはほ場に入らないなど注意する。

3 イチモンジセセリ（イネツトムシ）

6月中旬現在、丹後地域で発生を認めている。晩植田や窒素過多の田で発生が多くなる。防除時期は7月下旬～8月上旬の幼虫ふ化期である。

4 フタオビコヤガ（イネアオムシ）

- (1) 6月中旬現在、丹後地域で発生を認めている。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

5 イネクロカメムシ

- (1) 常発地では注意する。
- (2) 6月中旬から7月上旬が越冬成虫の水田への移動の最盛期であり、この時期の薬剤防除が最も有効である。ほ場をよく観察し、3株に1頭以上の発生（幼虫を含む）を認めたら防除を実施する。

ダイズ、アズキ

1 ハスモンヨトウ

- (1) 卵塊は綿毛状のもので覆われ、ふ化した幼虫は若齢期を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透け見えることから「白変葉」と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下する。

2 白絹病

- (1) 本病は酸性土壌で発生しやすいため、作付前に石灰を施用し、土壌酸度を矯正する。
- (2) 未熟な有機物の施用は、本病の発生を助長する。生ワラや緑肥作物等をすき込んだ場合は、十分に腐熟化してから、は種または移植を行う。
- (3) 土壌中に残存した菌核が第一次伝染源となるので、前年発病したほ場は連作を避ける。
- (4) 菌核は3～4か月湛水すると死滅するので、水稻を含む輪作が有効である。

チャ

1 ツマグロアオカスミカメ

地域によって一番茶期に加害するもの、二番茶期に加害するもの、両方の茶期に加害するものがある。薬剤散布は萌芽期及び一葉期に行う。

2 チャトゲコナジラミ

本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期（7月中下旬）である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 褐斑病（キュウリ）

発生すると被害が大きいため、夏秋キュウリでは注意し、下葉の摘葉、摘心等の予防に努める。

2 タバコガ類

果実に食入すると散布薬剤の薬効が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に留意する。

3 ハスモンヨトウ

「ダイズ、アズキ」の項を参照のこと

参 考

I 近畿地方 1 か月予報（6月18日から7月17日までの天候見通し）

令和4年6月16日
大阪管区气象台発表

＜予想される向こう1か月の天候＞

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半はかなり高くなる可能性があります。

向こう1か月の降水量と日照時間はほぼ平年並の見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、近畿太平洋側で平年より少ない確率ともに30%です。日照時間は、平年より高い確率が30%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、高い確率40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	20	30	50
降 水 量 (日本海側)	30	40	30
降 水 量 (太平洋側)	40	30	30
日 照 時 間 (日本海側)	30	40	30
日 照 時 間 (太平洋側)	30	30	40

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年比高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。」としました。

（注：日本海側は丹後・中丹地域、太平洋側は南丹・京都乙訓・山城地域を示す）

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合（5～9年）は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量（発生量、発生面積等）

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－